

対話事例にみる児童の社会認識の発達

——漁村におけるインタビュー調査より——

An Analysis of the Dialogue with Children in a Fishing Village about Conception of Social Institutions

教育心理学教室 田丸敏高

Toshitaka Tamaru * : An analysis of the dialogue with children in a fishing village about conception of social institutions. (Journal of the Faculty of Education, Tottori University, <Education Science>, 1987, 29-1)

はじめに

子どもの認識活動ないし思考に接近するためには、様々な方法が考えられる。本研究においては「対話法」を用いているが、同様の方法は、発達心理学の巨人とされている Piaget, J (1896—1980) や Wallon, H (1879—1962) によって既に用いられている。

Piaget (1926) は、こうした方法を臨床法と呼び、精神科の医師の臨床検査と照応させてとらえている。「臨床検査というものは医師が自ら問題をつくり、仮説を立てて、その仮説に条件を適合させ、そして最後に各仮説を、彼が会話において刺戟する反応に対してテストすることによってそれを統制するという意味で実験的のものである。」そして、その意義について、「テストと直接観察の方法における最も長所とするところのものを結合し、両者の短所とするところのものを排除する」としている。この方法によって、Piaget は児童の思考の実在性、汎心性、人工性を示した。

また、Wallon (1945) は「子どもの思考の起源」に関する研究を対話法を用いて行っている。彼は、「子どもの思考能力をためす唯一の手段は、子どもから説明をうるような仕方、子どもに質問することだ」と考える。そして、この方法の意義について、とりわけ「子どもが、ある障害に直面したとき、どのように、ふるまうか。子どもの可能性は、なにか。子どもの不充分さは、どんなものか。子どもは、どんな精神的メカニズムをそなえているか」をみるときに高く評価する。こうして、Wallon は、「子どもの出発点における思考のはたらき」である「対」や「矛盾」、「混同心性」を明らかにしている。

なお、Piaget においても Wallon においても、主たる質問は自然現象に関してなされている。これは、子どもの興味および研究者の関心の時代性によるものと考えられる。本研究では、社会認識に関して対話法が用いられた。ここに、本研究の特徴がある。児童が社会を認識し始めるとき、児童の思考に特有の困難があらわになる。ここでは、こうした困難に着目しながら、児童の社会認識

* Department of Psychology, Faculty of Education, Tottori University, Koyama-cho Tottori, 680, Japan.

過程を明らかにすることを課題とする。

方 法

被験児 T小学校 2年生13名, 4年生24名, 6年生15名

日時 1986年7月16日 午後1時から4時

場所 T小学校教室

手続き 一人当たり30分程度の個人面接を行う(面接員15名)。

インタビュー内容は、カセットテープを用いて録音した。

質問項目

1. あなたは、お店でお菓子を買ったことがありますか。お菓子を買うときにはどうしますか。どうしてお金を払うのですか。そのお金をお店屋さんはどうすると思いますか。
2. バスに乗りたいときはどうしますか。どうしてお金を払うのですか。運転手さんはそのお金をどうするのだと思いますか。
3. 太郎くんが、お店屋さんでお金を払ってお菓子を買いました。太郎くんとお店さんとではどちらが得をしたと思いますか。それはどうしてですか。
4. お店屋さんに行ったところ、バナナは1本30円、スイカは1個800円でした。どうしてバナナよりスイカの方が値段が高いのですか。
5. お店屋さんに行ったところ、いわしは1匹30円、はまちは1匹800円でした。どうしていわしよりはまちの方が値段が高いのですか。
6. お金で買えるものにはどんなものがありますか。お金で買えないものにはどんなものがありますか。
7. お金とは何ですか。
8. Tの人たちは、どんな仕事をしていますか。知っているものをあげてください。
9. 大人は、いろいろな仕事をして働いています。大人は、どうして働くのですか。
10. あなたは、はやく大人になって働きたいですか。それはどうしてですか。
11. 大人は、働くとお金を稼ぎます。それはどうしてですか。お医者さんと学校の先生とは、どちらが余計にお金を稼ぐと思いますか。それはどうしてですか。
12. あなたは、お金がほしいですか。どのくらいほしいですか。それはどうしてですか。お金がいっぱいあったらどうしますか。
13. あなたは、Tに生まれて良かったと思いますか。それはどうしてですか。Tの良い点はどんな点ですか。Tの悪い点はどんな点ですか。
14. 30年後、Tはどんな町になっていると思いますか。
15. あなたがもし町長さんだったら、Tをどんな町にしたいですか。
16. 小学校を卒業したら、あなたははどうしたいですか。
17. あなたはここでずっと暮らしたいですか。それはどうしてですか。

結果と考察

用いられる資料は、インタビュー過程そのままを書き出したものである。各年齢段階に典型的な対話事例を示しながら子どもの社会認識について考察していく。

1. 場面に拘束された思考

M. N. (2年生)

お菓子を買うときはどういうふうにして買う?—「お金を出して買う。」—「どうしてお金を出すと思う?—「わかりません。」—「どうして?考えてみて。Mくん考えてみて。なんでお金払うんだろうか?—「店のもん勝手に取ったらいけん。」—勝手に取ったらいけん、ただで持って帰ったらいけんなあ。—「店のもんは店のもん。」—店のもんを持って帰るのは、なんでお金払わんといけんか?—「どろぼうしたらいけん。」—……そこのお店の人はな、Mくんがお金を払ったらそのお金をどうするんだと思う?—「お店の人がお金を払う。」—どこに払うんだ?—「お店のおばさんがお金を出した。……わかりません。」—考えてみんさいな。どこに払うんだと思う?Mくんは、どっか払うって言ったなあ、おばさんが。—「お店のおばさんが払う。」—だれに?—「お金を出した人。」—だれだろう、お金を出した人って?—「わかりません。」—やっぱりわからんか。Mくんがお店にお金を出して、お店のおばさんはMくんからお金をもらって、それでそのお金をお店のおばさんはどうする?—「お店のおばさんは、おつりに払ったり、おつりを入れといておつりを払うときに出して。」—おつりは全部入れたままにしとく?—「おつりのときに出して。」—おつりは全部出すんか?チャーリーンっていうところに、まだこん中にお金残っとるだろう。そしたらその残ったお金はどうするん?—「残ったお金は今度来た人がおつりを……うーん、わかりません。」—今度来た人におつりを出したりするんだな。そしたらみんなおつりを出しちゃうんだろうか?—「引き算みたいに600円出して、おつりを出したら後で400円もらえる。」—そしたらみんなおつりで出しちゃう?あとお店に残らんか?—「わかりません。」—そのお金をどうするだろうなあ?—「やっぱりわかりません。」—わからんか?—「店のおばさんじゃないとわからん。」—じゃあ、もしMくんが店のおばさんだったらどうすると思う?—「だけど、わかりません。」—わからんか?—「勝手にお金取ったりしたらいけんけ。」—M商店さん、Mお店屋さんっていうのがあってな、お菓子買いに行ってお金払うだろ。おつりもらうわな。そしたら、あとMくんにお金が残るがなあ、いくらか。もしぼくが1,000円持って行って600円のものを買って1,000円出したら、Mくんがおつりを400円くれるな。あと600円残るが、それをどうする?—「それはそん中に入れとく。」—そん中ずっと入れとくか?—「ずっと入れとく。ほかの人が来てお金を出して、おつりがいるときに出す。」—それだけか?—「はい。」

本児は、場面に縛られている。お金はお菓子の買手から売手に渡され、次にはおつりとして売手から買手に返される。お金の一部は、レジの中に蓄えられるが、それもいつかまたおつりとして買手に渡されるのを待っているだけである。残りはあっても、ずっと入れておかれるだけである。

思考が場面を越えられないため、お金の流通について想像することは本児には困難である。買手から受け取られたお金が商品の仕入れに使われたり生活費とされたりすることは、本児には想像しえないことなのである。「お金を払うこと」と「おつりを返すこと」とは、対となって本児の思考を堂々めぐりさせる。

本児のことばには、ときどき主語が欠ける。行為の主体が売手であるのか買手であるのか明示されない。能動と受動とか混同される。ここにも場面に拘束された本児の思考の特徴がよく現れている。

太郎くんっていう人がおっつてお店屋さんにお菓子を買いに行ったが、そしたら太郎くんとお店屋さんのおばさんとはどっちが得をしたと思う？——「おばさん。」——おばさんが得したと思うか。どうして？——「おつりを出して……やっぱりどっちも得したと思う。」——どっちも得したと思う？おばさんはどうして得したの？——「おばさんはおつりをもらえるし、それにあの太郎くんっていう人はおつりのお金をもらえる。」——おつりの何がもらえる？——「おつりの……わかりません。」——わからん？太郎くんがなポテトチップスを買って100円を出して買って出したら、太郎くんはポテトチップスがもらえるだろ。そしたらお店のおばさんは太郎くんから100円もらうな。どっちが得したんだろ？——「お店のおばさん。」——どうしてだと思っ？——「おばさんは太郎くんっていう人がお菓子を買ってお金をもうかる。」——どうしてもうかると思っ？——「太郎くんという人がお菓子をかって100円お店のおばさんに出したけ。」——もうかると思っ？——「太郎くんという人がお菓子をかって100円お店のおばさんに出したけ。」——Mくんは、太郎くんとお店さんのどっちになりたい？——「やっぱりどっちも。」

子どもにはお金は価値あるものと考えられている。どちらが得かを考えたとき、まず店のおばさんだと思っ。しかし、商品と貨幣との交換が考えられているわけではない。違ったものが交換されるのはなぜか？何が両者に共通しているのか？こうした問題は本児の思考を越えている。そこで、おつりを意識したとたん太郎くんも得したと考えてしまう。確かに、お使いとして置い物に行き、おつりを駄賃でもらったら——本児にも経験があるであろう——太郎くんも得したと思われるのであろう。

本児では、損得が相補的關係をなしていない。したがって一方の得が他方の損にはならない。おばさんはお金、太郎くんはお菓子というそれぞれ別々の理由で双方の得が認められる。同等なものによる比較は見られず、別個の場面が思い浮かべられる。

今度のはまちが1匹800円、どうしていわしよりはまちの方が高いと思っ？はまちといわしとどっちが大きいかな？——「わかりません。」——どうしてだろうな？考えてみて。いわしが30円で、はまちが800円。——「いわしって小さい魚だでなあ、骨がいっぱいある。」——だから安い？他に何かないかな？——「えっと、わかりません。」——さだとたい、さば食べたことある？——「あります。」——たいは？——「食べたことないけど大きさは知っています。砂糖が入るとのなんかで見たことがあります。」——さばは？——「食ったことあるし、見たこともある。」——どのくらいの大きさだ？——「このくらい。」——さばとたいと、さばの方が大きいな、たいに比べて。どっちが高いと思っ、値段が？——「さば。」——どうして？——「たいは今ごろあんまり釣れんけ、味がわからんけ、買わんと思っ。」——……——バナナとスイカだったらどうだったかいな？——「スイカ。」——どうして？——「大きいし、味がおいしいから。」——おいしいから。いわしとはまちは、いわしよりはまちの方が大きいだがな？——「だけど値段が高いのはおいしいっていうことで、安いっていうのはまずいっていうことかもしれん。」

物の値段の違いはどこから来るのだろうか。本児は、最初経験的場面的に考えようとする。そして、大きさとおいしさに言及している。片方だけではどこか理由不足を感じるとこの2つを合わせて理由にする。

「値段が高い」と「おいしい」とは、対を為している。そのため、「おいしいから値段が高い」は容易に「値段が高いからおいしい」に替わる。

Mくんが37歳になるころにはTの町はどんなふうになつてくると思う？——「わかりません。」——想像してみて。——「古くなつてくる。」——どんな感じになつてくると思う、おうちやあが？——「おうちやあはみんな貧乏になつてくる。」——みんな貧乏になつてくるかなあ？——「ならんうちもあるかもしれない。」——この港は大きくなっていくと思うか、そのままか？——「大きくなっていくと思います。」——舟は？——「大きくなっていきません。人が作っていかんと大きくなっていきません。」——町は？山とか木とかは？——「わかりません。」——じゃあ、どうしてこんなふうになつていくと思う？たとえばどうして貧乏になつていくと思う？——「お金をいっぱい使ったり、家に落書きやあしたりするけ、きたない家になつていくと思う。」——港はどうして大きくなっていくと思う？——「港は聞いたことがある……わかりません。」

本児が自分の町の将来を想像するとき、まず経験した場面——古くなる家、落書き、お金を使ってしまうこと——から始める。次いで、人から聞いたという伝聞による。しかし、その伝聞の根拠については想像しえない。真の推論活動には、まだ至らない。

M. R. (2年生)

Rくんは、お店でお菓子を買ったことあるわな？——「ある。」——そのときにね、お菓子を買うときにはどうする？——「おねえさんと一緒に買いに行く。」——じゃあ、おねえさんはどうする？お菓子をがさっと店屋から取って、で、あとどうする？ただ持って帰っちゃう？——「うん、お金を払って、あっ、お金を出して買って帰る。」——じゃあ、どうしてお店の人にお金を払うんだと思う？——「取って帰ったらどろぼうと思う。」——どろぼうと思う？——「うん、夜のときに遅れて取りに行ったらどろぼうと思う、お金を払わんと。だけー。」——じゃあ、お店の人がやるって言ったらもらって帰る？——「遠慮する。」——そうかそうか。じゃあ、お店屋さんはもらったお金をどうすると思う？——「……」——何に使うかな？——「置いとく。」——置いとくーう？——「うん。」——置いといてどんだんお金をためる？——「おつりを出したりする。」——おつりを出すけど、もらったお金があるだろう？——「うん、50円やあ出したらなあ、なんぼかくる、おつり。」——おつりくれる。もしも、400円の本買いに行ったときにな、1,000円出したら600円払ってくれるだって。じゃあ、その400円のお金をどうする？自分は、本屋さんどうしなると思う？——「あんなあ、1,000と、1,000円もらったおつり……」——……——600円出すだろ。で、もらった1,000円札はどうすると思う？またおつりに使う？——「わからん。」

本児においても場面的思考が特徴的である。お金は買手から売手に支払われ、再び売手から買手におつりとして返される。それ以外のお金の動きは、本児の想像を越えている。余分なお金は置いておかれるだけである。

そうしたことから、本児にとって、ものを買ったときにお金を支払わなければいけない理由は、

「取って帰ったら（他人が）どろぼうと思う」からであるということになる。理由は、社会制度ではなく、日頃大人から言い聞かされている「道徳的なもの」にとどまっている。

「どろぼうと思う」という表現にみられるように、主語が明示されないのも本児の場面的思考の特徴である。なお、どろぼうの話に後に「夜のとき」が出てきたのは、Wallonの言う「対」のためであろう。

M. A. (2年生)

お店でお菓子買ったことある？——「うん。」——……そんなときになあ、どうやって買った？——「えっとー、お金を出して買った。」——なんでお金出したんだ、なんでだろう？——「うーん、あー、わからん。」——なんでお金払うのかなあ？——「お金もうけとるけー。」——だれがお金もうけとるだ？——「お店の人。」——お店の人がお金もうけとるか？——「うん。」——ふーん、なんでお金もうけんといけんのかなあ？——「お菓子を持ってきたな、おじさんに集めて渡す。」——じゃあ、お店の人はな、お客さんが払ったお金はみーんなお菓子とか持ってきた人に渡しちゃうんか、みんな渡しちゃうんか？——「うん、みんな。お金の値段だけ。」——あとはどうする？——「あとは置いとってから、また、ためたんを……」——なに、もっとはっきり言って？——「あれ、集めたんだだけ残ったのと一緒に一緒に置いとってから、また、持ってきたのに、あれ、ためとってから、また、持ってきたおじさんに、あれ、お金をまた払う。」——じゃ、みーんな、やっぱりあれか、持ってきたおじさんにあげちゃうか？——「ううん、値段だけ。」——値段だけ。だから、そのほかのやつはどうする？——「うん、置いとってから、置いとってから……」——置いといてどうする？——「えとな。」——置いとくだけか？——「置いといてから、またたまったら、また、持ってきたおじさんに、あれー、おじさんにお金を払う。」

本児は、お店の人が、客から受け取ったお金をためておくだけでなく、仕入れに使うことを考える。おつりの場面しか思い浮かべられない子どもに比べれば、一歩進んでいると言えるかもしれない。しかし、本児は、「お菓子を持ってきたおじさんにお金を渡す」ことを想像したとたん、お金の他の使われ方を考えることができなくなってしまう。1つの思考が他の思考を妨げる。1つの場面を越えようとして、また再び次の場面に拘束される。

(バスに乗ったとき) なんでお金払った？——「あれ……店と同じように、あれ、お金もうけとるけ。」——だれがお金もうけとるだ？——「バスの運転手さん。」——じゃあな、バスの運転手さんな、もうけたお金どうするんかなあ？——「ん？」——もうけたお金、お客さんにもらうだろう？——「集めとってから、そして、あったお金でごはんや買ったりする。」——ごはんなんか買ったりする。それだけか？——「それやかなあ、それや、バスの中に入れとってから両替するときに。」——ああ、両替。——「やる。」——ほかには、それだけ？——「うん。」——それだけか、もうなんにも使わん？じゃあな、その運転手さんが集めたお金っていうのはな、運転手さんが全部使っちゃうんか？——「ううん、ほかの人。」——ほかの人。ほかの人ってだれだ？——「運転手や、あの一、バスの運転手さんや、あれ、あれ、なんだいな、パトカーじゃなくてタクシー。」——タクシー？あー、待ってよ待ってよ。だから、バスに乗るだろ、バスに乗ったときにお金を運転手さんに払うんだろ。この箱に入れるんだけど、そのじゃ箱に入れたお金はな、運転手さんが全部使っちゃうんか？——「ううん。あ、たくさんになるまで入れとってから、両替するところのお金に入るけ、置いとく。」

——置いてくだけか？——「置いてって、満杯になったら取る。」——取ってどうする、運転手さんが使っちゃうんか？——「うん、パンや買ったり、バスや洗ったりする。油や入れたり。」

ここで、本児が最初に想像するお金の使われ方は、生活費である。次に、両替の場面が出てくるが、店屋のおつりのときと同様、この場面で本児の思考はいったん閉じられる。しかし、執拗に質問が繰り返されると、「ほかの人」が引き出される。お金のほかの使われ方から「ほかの人」が出てきたのであろうが、そのため本児の思考は脇道に外れていく。思考の一貫性を維持することは、困難なのである。

本児は、「タクシー」まで外れた後に、再び箱に入っているお金を想像する。そして、今度は、バス代やバスの維持費に思い至る。場面的拘束から抜け出ようとしている。

2. 推論的思考の芽生え・場面的思考との葛藤

T. Y. (4年生)

お菓子を買うときはどうすればいいですか？——「まずおやつを取って、そいで食品を出して、そいでお金を出します。」——お金払うな。どうしてお金を払うんですか？——「はい、買うものだから。買うものだから。」——買うものはお金払わんといけん？——「はい。」——どうして、どうして買うものはお金払わんといけないんですか？——「……」——お菓子を持ってってお金を払ってお菓子もらうな。どうしてお金を払わんとお菓子がもらえんだらうな？——「自分のためになるものだから。」——……——お店屋さんはそのお金をどうしますか？——「うーん、何かに使っちゃいます。」——そのお金を何かって、たとえばどういうこと？何に使うの？——「なに、お店などで買うもの。」——お店などで買うもの？お店の人がまたどっかのお店で買うもの？——「服とか。」

本児は、お金を払うための理由を発見しようと努力している。そして、「自分のためになる」という理由を正当なものだとして述べる。お金の流通についても考えは始めている。

どうしてバスに乗るときにな、お金を払わんといけんですか？——「自分を遠くまで連れていってくれるから。」——じゃあ、そのお金は、自分が払ったお金は、その後どうなると思いますか？こんな箱みたいなのに入れるがんな、ガチャって。それからどうなると思う？——「取り出しているところを使うと思います。」——取り出しているところ、だれが使うの？——「そのバスの運転手さん。」——運転手さんがそのお金を取って、それからそのお金は運転手さんがもらって帰るの？——「じゃなくて、半分は自分がもらって、そしてもう1つは会社などに持っていきます。」

ここでも、お金を払うに正当な理由「遠くまで連れていく」を見い出す努力が見られる。また、運転手が得たお金については、会社に渡されることが推理されるが、それだけでは運転手に不公平ということで「半分」ずつの分配が思いつかれる。

本児は様々な理由を考える。

(太郎くんがお店屋さんで買い物をしたとき) どっちが得したと思いますか？——「うーん、お店屋さんだと思います。」——どうしてお店さんが得した？——「おやつだと、あれ、買うものが決まっとるけど、でもお金もらった人は何にでも使えるからです。」/ どうしてバナナよりスイカの

方が値段が高いんでしょうね。——「大きいし、バナナは1年間あるし、スイカは夏にしかないから。」——……どうしてスイカよりちっちゃいのが高いんだろうな、メロンの方が？——「あまり取れないし、それにうまいから。」／どうしていわしよりはまちの方が高いんですか？——「それも、なかなか取れないからです。」

1つの事柄に複数の理由がつけられ、もっともらしさを高めようとでもするかの感がある。複数の理由によって、特定の場面に拘束された思考から抜け出そうとしている。

30年後っていたら40歳になるかな、な、40歳になったときにTはどんな町になってると思いますか？——「……良くなっていると思います。」——うん、どういうふうになくなるかな？たとえば、町の様子とかはどんなふうになくなるのかな？——「土がなくて、地面がなくて、全部コンクリートになっていると思います。」——うん、地面がコンクリートになって、ほかの所は？——「家が変わっていると思います。」——……どういうふうになくなるのかな？——「全部コンクリートみたいなので建っていると。鉄みたいなので。」——そうか、学校は？——「学校とかは、夏にはな、クーラーなどが。」

町の将来のイメージは、「近代化」＝「都市化」に固定されている。

F. T. (4年生)

どうしてお金をお店の人に払うの？——「買うから。」——買うと、どうしてお金を払わなきゃいけないのかなあ？——「お店の人がごはんや食べられなくなるから。」／バスに乗りたいたきははどうする？——「お金を払って乗ります。」——どうしてお金を払うのかなあ？——「バスの運転手さんが給料がなかったらいけないから。」——じゃあ、運転手さんはそのお金をどうするんだと思う？——「子どものおこづかいやごはんを買って食べさせたりする。」

本児は、お金を払う理由として相手の「生活費」を考える。しかし、その表現は多分に心理的ないし目的である。お金の流通の必然性について認識しているわけではない。

太郎くんがお店屋さんでお金を払ってお菓子を買いました。太郎くんとお店屋さんとはどちらが得をしたと思いますか？——「どっちも得していない。」——どうして？——「お菓子をお店さんがお金を払って買って来て、それで買う人がお金を払ったら、買った人もそのお金と同じ物を持ってお返しお店さんはそれと同じ代金を。」——じゃあ、どっちも損したの？——「損はしてないけど、ふつう。」

「お菓子＝お金」という等式で結ばれる関係を、本児は洞察し、それを「同じ」ということばで表現している。なぜ同じなのかについては、その根拠を把握しているわけではないですが、すでに感じとっている。

どうしてバナナよりスイカの方が値段が高いのですか？——「スイカは1個といっても大きいし、バナナは1本といっても少し長いから、だから値段が違う。」——スイカが大きいから？——「はい。」

——じゃあ、どうして大きいと値段が高いのかなあ？——「得するから。」——誰が得するの？——
「買った人。」／どうしていわしよりはまちの方が値段が高いの？——「はまちはおいしい。」——ど
うしておいしいと値段が高いのかなあ？——「買った人が得するから。」

本児は、値段の基に損得関係を考えている。単に見かけで判断するよりも本質的なものに迫ろうとする思考を見せている。とはいえ、それは客観的關係として考えられているわけではなく、まだ主観的に考えられている。

お金で買えるものにはどんなものがあると思う？——「食べるものとか着るものとか履くものとか。あと暖かくするものとか寒くするものとか。」／お金で買えないものにはどんなものがありますか？——「人間の命や影や……」——どうして人間の命はお金で買えないの？——「人間の命だったら、死ぬからお金は使えないし。」——じゃあ、影はどうして買えないの？——「影は人間にひっついて取れないし、日が当たって取れても取れない。」——じゃあね、お金って何ですか？——「ものを買うもの。」

買えるものに対しては、カテゴリー分けて答える。しかし、買えないものに対しては、具体的事物が述べられる。買えない理由も、「死ぬから」(人間)とか「取れないから」(影)とか方向違いのことが言われる。おそらく、買えるもののイメージとして「手に取れて、なくなる」があると思われる。

大人はね、どうして働くのですか？——「お金をもうけるため。」——どうしてお金をもうけるために働くのかなあ？——「ごはんを食べたりせないけんけ。」——あなたはね、早く大人になって働きたいですか？——「はい。」——どうしてですか？——「自分でお金をためて、いろんなものを買ってみたいです。」——どんなものを買ってみたいですか？——「服とか靴とかそんなもの。」——じゃあね、大人は働くとお金を稼ぎます。それは、どうしてですか？——「会社で働いたら、したら、会社の手伝いっていうか、社長がやらなくてもいいから、社長が、給料っていうか、その会社で作ったものを売ってお金をもうけて、そのお金を給料にしてその会社に勤めている人に分けてあげる。」

大人は、「お金」のために働くと言われ、推し量られる。働いてお金が得られるのは、社長の代わりに働いたからである。労働それ自身と賃金とが関係づけられている。

きみはね、将来どんな人間になると思いますか？——「わかんない。」——考えてごらん？——「漁師になって海で働く。」——じゃあ、どんな人間になりたいの？——「やさしくて、強い人間。」

N. H. (4年生)

お店屋でお菓子を買ったことがありますか？——「ときどきある。」——お菓子を買うときどうしますか？——「なるべくガムやあは着色料が使ってあるのは買わないで、チョコレートなんかを買う。」——お菓子を買うときにお金を払うけど、どうして？——「これくださいって言って、品物を見せて、おつりをもらうまで待って……」——どうしてお金払わなきゃいけないんだろう？——

—「お店の人が商売のために仕入れてきたから。」——そのお金をどうするんだと思う、その後？—
—「それは暮らして、何か商品を買ったりするために使うのだと思います。」

本児は、直接的場面を越えて推論する能力をもっている。もちろん、それは、他人から聞いたことや学校で教わったことに由来しているのかもしれない。しかし、彼の想像はすでに特定の場面を抜け出している。

バスに乗ってお金を払うけど、そのお金はどうなると思う？——「そのお金はバスの運転手さんの給料になると思う。その前に細かいお金はバス会社に渡して、それをお札に替えてもらってそれをもろう。」

バス料金について考えるときも、本児の思考は特定の場面にとらわれていない。体系的な制度についての認識にはまだ至ってないが、場面を越えた推理が始まっている。こうした思考様式は、他の箇所にも示される。

お金で買えるものにはどんなものがありますか？——「何々以外それは全部って言っていい？」——いいよ、それでも。——「人の命以外。」——じゃ、それ以外ってことは、人の命はお金で買えないってことだ。ほかにはない、お金で買えないもの？——「自分がとっても大切にしているもの。」——なんでお金で買えないんでしょう？——「お金よりも、買えないものの方が大切だから。」——大切だから。じゃあ、お金って何ですか？——「お金って、お札でも玉でもいい？お金が必要な世界にはとっても貴重なものだけど、たとえば、戦争中はお金が必要ない。そんなときには、ただのゴミっていうか、ただの紙切れだと思う。だけど、この時代はお金はとっても貴重なもの。」

本児は、「何々以外」という包含関係を用いている。これは、Piaget も言うように、論理的思考の基礎である。また、質問の答え方に対して質問している。これも9、10歳になって現れることである。言語的思考（内言による対話）を示唆している。戦争の話は、教育ないし大人の影響であろう。

先生は学校で子どもに勉強教えるけど、どうして？——「それは、先^のの仕事だから。」——子どもは学校に通っているけど、大人は通いません。どうして子どもは学校に行くのでしょうか？——「大人は、子どものときたくさん勉強しているから。よく子どもの仕事は勉強って言うでしょう。それで、大人の仕事は仕事。」

「なまいきな」言い方ではあるが、「仕事」ということばを用いて、その共通な尺度によって、大人と子どもとが比較されている。「大人の仕事は仕事」という言い方が、そのことをよく示している。しかし、論理的思考がどこでも始まっているというわけではない。

どうしてバナナよりスイカの方が高いのでしょうか？——「大きいから。おいしいし。」／メロンはスイカより高いよ、どうしてかな？——「あれは、日本では数が少なく、珍しい貴重品だから。」／さばが（いわしより）高いのはどうして？——「おいしいから。」

ここでは、共通の尺度により思考は見られず、個別的な理由が次々と述べられる。

T. K. (4年生)

(お店でお菓子を買うとき) なんてお金払うんだろう? ——「作った甲斐がないから。」——……
——じゃあな、お店の人はそのもらったお金を何に使うんでしょう? ——「うーん、おかずとか自分の買いたいもの。」——買いたいものを買う, それだけ? 全部使っちゃう? ——「残しとく。貯金する。」——……バスに乗るときもやっぱりお金いりますね, どうしてかな? ——「うーん, 乗せる甲斐がないから。」——どうしてバスに乗ったらお金払わんといけんのかな? ——「んー, えっとー, 何のために作ったかわからないから。」——……なんでお金もらわんといけないのかな? ——「お金もらわないと商売じゃないから。」——商売するためには絶対お金がいる? どうして商売するためにはお金がいる? ——「んー, 商売しないとお金がたまらないから。」——……運転手さんは集まったお金を何に使うんですか? ——「おかず。うーん, 会社にちょっと加えて貯金する。貯金は残った, 貯金して好きなものを買う。」——会社にはちょっとだけ, ちょっと置いて使うの, あとは? ——「ボーナスでもらう。」——……バスを運転しとって, お客さんにももらったお金, ここにあるでしょ。これをまずどうする? ——「会社に全部渡す。」——会社に渡して, じゃあ, どうする, 渡したお金は? ——「んで, ボーナスの日にそれをもらう。」——どのくらいもらう? ——「バスだけ。」——全部もらう? ——「ちょっと。」——ちょっとしかもらえん? たいへんだな。運転手さんはちょっとだけもらって, 会社に残したお金はどうするの? ——「うーん, 今度バス作るときに配る。」——バス作るときにか? じゃあね, 運転手さんはもらったお金何に使うの? ——「うーん, たくさん貯金する。」——貯金だけ? ——「んー, 自分のいるだけ貯金して, あとは使う。」

本児は、お店にお金を払うのは「作った甲斐がないから」という心理的理由づけをする。しかし、これはすでに視点の移動を伴っている。自分の視点からお店屋さんの視点へ、移動がなされている。バス代のことを考えるときもこうした視点の移動が越こり、運転手の立場から「(バスを) 何のために作ったかわからないから」とか「商売だから」とか「お金がたまらないから」とか考え始める。述べられている理由は主観的なものではあるが、相手の立場からも考えてみるということは1つの進歩である。

また、この児は貯金にこだわる。貯金は、いつもこの児が耳にすることばかもしれない。「お金」はまず「貯金」と結びついている。そのため、「自分のいるだけ貯金」するのが先決で、「あとは使う」ということになる。

どうしてスイカの方が高いんだと思う? ——「んー, 大きいし, 重たい。実がたくさんはっている。」——じゃあ, 大きくて実がたくさんはっているものは何でも高いのかな? ——「んー, まずかったら安い。」——おいしいものは高い? じゃあ, おいしくて大きくて安いものって絶対ないかな? ——「うーん, 大安売りのとき。」——そうか。でもバナナだっておいしいで? ——「うん, けど小さい。」——じゃ大きいものが高いのかな? じゃ大きいものはみーんな高い? ——「中がからっぽだったら安い。」——大きいな, このくらいの石ころとちっちゃいちっちゃいダイヤモンドとどっちが高いと思う? ——「ダイヤモンド。」——ダイヤモンドだな。どうして, ちっちゃいが? ——「うーん, 石もらったって何の価値もないし, けどダイヤモンドもらって売ったら金がもうかる。」——じゃあ, 大きくってもな, お金にもならないものもあるでしょ。なんでスイカだったら高

いんかなあ？——「んー、味がおいしい。」——おいしいから？バナナもおいしいよ？——「けどスイカ1切れ分でバナナ1個分と同じことだと思う。」

本児が値段（価値）について考えるときは、まだ見かけにとらわれている。しかし、その際言及される見かけは多様である。「大きい」「重い」「多い」などの感覚的諸性質が考えられる。そのため、ダイヤモンドによって矛盾が持ち込まれても再び事実が持ち出されるにとどまる。同語反復（大きくても高くはないのは価値がないから。お金にならないから。）に陥ったり、別の性質（おいしい）が述べられたりする。スイカ1切れ＝バナナ1個という等式まで発見するが、その根拠を考えることはできないでいる。

なんで、はまちの方が高いんかなー？——「はまちの方がおいしいから。」——おいしいから、いわしよりも。じゃあ、おいしいものの方が高いんかなー？——「それに、それとその季節しか獲れないものだから。」——どっちが？——「はまち。」

本児は、常に具体的なもの（はまち）について思考する。質問は、一般化して（おいしいものはすべて高いか）なされる。それでも、はまちから離れることはできない。その代わりに、ここでは漁村の子どもらしく客観的理由が付け加えて語られる。

お金で買えるものには、どんなものがあると思いますか？——「うーん、使えるもの。」——使えるものって？——「使って損をしないもの。」——……たとえばどんなもの？——「んー、それか、新聞は読んでためになるし、電話とかは遠くでも聞こえる。とか、水道がないと生きれないから、水道も。電気がないと暗くて見えない……」——はーん、なるほどなあ。ほかにはもうない？——「ガス。」——ほかにはないかな？——「うーん、マッチ。ロウソク。」——そうかそうか、ほかにはもうない？——「んー、ストーブ。」——じゃお金で買えないものにはどんなものがあるかな？——「えっとー、山。」——あー、確かに。ほかには？——「うーん、人間。」——そうだなー、ほかにはないかな？——「持っているもの。」——持っているもの、誰が？——「自分が。買っても1つあるけど、買っても意味がないから。」——自分が持っているものが買えない？——「自分が持っているものを買ったってどうしようもない。」——……でも、それは買えるけど買わないものじゃないか。そうじゃなくって、どんなにお金を出しても買えないものってないかな？——「空気。」——本当だな。ほかにはないかな？——「うーんと、えっとー、んー、太陽。」——ほんとほんと、ほかにはないかな？——「酸素と水素。」——ああ、すごい、よー知つとるな。ほかにはないかな？——「雨。」——ほかにはないかな？もうないかな？——「地球。」——確かに買えないな。じゃあな、お金って何だと思う？——「それを出したら何でも買える。」——何でも買える？でも今買えないものがあつたで。——「うん、それは何の役にも立たないから。」——空気は何の役にも立たんかー？なあ困るが。——「空気はどんなことをやっても出とるけ、大丈夫。」——じゃ、もう1回聞けどお金とは何ですか？——「んとー、えっとー、役に立つものが何でも買える、自然のものとか。」

本児は、お金で買えるものを聞かれて「使えるもの」と答えている。これは、1種のカテゴリー的思考を示していると言える。しかし、本児には、対が随所に現れ、カテゴリー的思考を一貫させるのを妨害する。「お金」は「損をしない」と結びついている。そこから、役に立つものが次々と述

べられる。「電気」と「ガス」、「マッチ」と「ロウソク」、「ストーブ」は、互いに対を構成していると考えられる。「役に立つ」が考えられるため、買えないものとして「自分が持っているもの」という答えが生じる。

本児は、お金の定義として「何でも買える」と言う。しかし、この「何でも」は普遍を意味しない。例外がいくらあっても矛盾とは思わない。今度は、再び「役に立つ」ことが基準になる。しかし、これも普遍的な基準ではない。例外にはまた別の理由が付け加わる。「空気はどんなことやっても出とるけ、大丈夫。」そして、最後には「お金」を媒介に「役に立つものが何でも買える」と表現される。

どうして大人は働くんだと思う？——「お金をためるため。」——……——大人はどうして働くのかな？——「お金もうけるため。」——お金をもうけるためだけに働くのかな？ほかに理由はないかな？——「好きなもん買うため。」——Tくんはな、早く大人になって働きたい？——「……」——働きたくない？——「(うなずく)」——どうして？——「うーん、たいぎい。」——なんでだ？——「めんどくさい。」——めんどくさいか？何しとった方がいい？——「自由。」——自由にしとくのがいいか。自由だったら何するだ？——「ファミコンとかいろいろ。」

本児には、働く理由は「お金」以外には見当たらない。そして、「お金」は買うことと結びついている。だったら、働かずに買えるなら「自由」の方がいいことになる。本児にとっての「自由」は、ファミコンである。

なんで働いたらな、お金がもらえるかなって思ったの？——「えっとー、その仕事をやったら魚がたくさん獲れて、それを組合とかに出したらお金がもらえて、もし会社だったら……あれ、なんだったいな？」——なんで働いたらお金がもらえるか？——「なんで働いたらお金がもらえるか。もし、会社だったら仕事のプリントとかをやって、あっ、もし、あれ、あの、ものを売る会社だったら……やおやだったら……なんだいな、問題？」——もう1回言うで。働いたらどうしてお金がもらえるのかな？——「会社だったらー、もし……働いたら会社とかにお金がたまって、そのお金とかで会社がいろいろ作って、それを作った人やあが何のために作ったかわからんけ。」——ふむふむ。だいぶわかったけど、なんでーその人やあがわざわざ作ったかお金をもらわんとわからんけ、お金をもらうか。それが理由か？何でお金あげんといけん？——「その人が何のために働いているかわからないから。お金のために働いているから。」

労働に対する賃金について考える際も、本児は具体的仕事で考えようとする。漁師の場合、会社の場合、やおやの場合というふうには、本児の思考は渡り歩く。しかし、一般的に考えることはできない。結局、会社のことから、「お金のために働いているから」ということに到着する(戻ってくる)。

お医者さんと学校の先生だったら、どっちがたくさんお金稼ぐと思う？——「学校。」——学校の先生か？どうして？——「学校の方がたくさん子どもが……えー、やるのがすごいから。子どもが何10人とかおったら、その集金代とか、子どもを教えるためにお金がたくさん、子どもすぐ教えたらお金がたくさんもうかるから。」——あーそうか、でもお医者さんだっただけたくさん来るで、患者さん。——「けど、時々少ないときがある。」——じゃ、たくさんたくさん学校の先生だったら

教えたり、お医者さんだったら患者さんの数が多い方がもうかるのか？——「だけー、医者のお金がもうかる方があるかもしれん。」——じゃ、ちっちゃい学校の先生と大きい学校の先生とどっちがたくさんお金がもうかる？——「大きい学校の先生。」——学校の先生はどこからお金をもらうんだ？——「うーん、えっと、中心部。」——どこの？——「鳥取。」——鳥取の中心部の人は、この先生はちっちゃい学校の先生だからちよつとで、この学校の先生は大きい学校の先生だからいっぱいあげるんか？——「よく子どもを教えた方。」

賃金に関して、本児は、数（子どもや患者の）という量を基準として比較できる。そのため、初め医者「時々」患者が少ないという理由で先生の方がもうかると考えたが、患者が多ければ医者の方がもうかると考えなおすことができる。条件との関係である規則について検討できることは、思考のうえで画期的な進歩である。しかし、この量的基準をすべての事象に一貫させて考える能力は、本児にはまだない。少し不自然さを感じると、別の基準、しかも量的ではなく単に質的な基準をすりこませてしまう。「よく子どもを教えた方」というのは、本児にとっては十分納得のいく基準なのである。客観的な基準が倫理的なものに取って代わられても、平気なのである。

どうして先生は子どもに勉強教えるんだと思う？——「教えないとお金がもうからないから。」——お金もうけのために先生は勉強教えるんか、それだけ？——「うんと、自分も学べるから。」——……—それだけ？ほかにないかな？——「お金のためだからどんなことでもやる。」——……—大人は学校に行かないのに、子どもはどうして学校に行くんだと思う？——「うん、大人はもう昔学校に行つとるから。子どももその学校卒業して勉強とかも卒業したら、大人みたいにお金もうけする。」——なんで子どもは勉強しとかんといけん？——「えと、自分のためにならないから。」——……勉強しとかんと困るかな？どんなことが困るかな？——「わからないこと、質問でもわかるように。」

本児は、あらゆる行動の意味について「お金」をよりどころにして判断しようとしている。その意味では、一般的判断が可能になりつつあると考えられる。しかし、「お金」でもってすべての行動の価値を判断することは所詮無理がある。無理に気づくと突然まったく具体的場面的な答えが現れる。成人ならば無理と知りつつ押し通し信じこもうとする者もあるうが、本児は場面的思考に戻るにより新たな考え方もする。ただし、そこに矛盾を発見することはない。矛盾は、一般的判断と一般的判断との間で初めて生じるのであるから。

3. 推論的思考への移行

H. N. (6年生)

お菓子を買ったときにどうやって買いましたか？——「自分のお金で。」——……—せっかく(こづかいとして)もらったお金をな、お店に行って払うの、もったいないと思わん？なんで払うんだ、だけどそれでも？——「お金が造られているから。」——……そのお金を店の人はどうすると思いますか？——「貯金とかする。」——ほかにどうしますか、貯金のほかに？——「子どもとかにやる。」——まだ、ほかに使いますか？……—「それから、鳥取やに行ったときに使う。」/バスに乗って〇〇に行ったときに、降りるときにどうした？——「お金を払った。」——なんで降りるときにお金を払うんですか？——「さっきと同じ事言ってもいい？」——同じと思ったら同じ事を言ってもい

いです。違うと思ったら違うふうに言ってください？——「日本にはお金があるから。」——お金がなかったら払わない、世の中に？——「食べ物とか払えばいい。」——じゃ、どうして食べ物にしる、食べ物で払うにしる、どうして何かを払うの？——「お金が、あの……、あつ、生活できないから。」——運転手さんは、じゃあ、Hくんが払ったお金をどう、運転手さんは払われたお金をどうすると思いますか？——「家のために使ったり、貯金したりする。」——じゃあ、集めたお金はごっそり家に持って帰って、自分で使うってこと？——「えっと、バスの、バスが留まる所とかに行つて、社長が分ける、みんなに。」——社長がみんなに分けて、持って帰って？——「それを家のためや貯金に使う。」——じゃ、持って行かれた社長さんは、配った後どうしますか？——「社長の分も配る。」

本児は、お金を払う理由として、お金が存在していることをあげる。お金が世の中になければ、代わりに「食べ物とか払えばいい」と考えている。おそらく、歴史の学習を通じて学んだことを基にして答えているのであろう。お金は、物の代わりであり流通手段であることが把握されているのであろう。

得られたお金の使いみちに関しては、貯金や生活費がイメージされている。また、社長による分配と、社長自身の不労所得とが思い浮かべられている。

思考は場面の拘束から解放され、社会的歴史的な推論に道が開かれている。

(お菓子を買った) 太郎くんとお店屋さんとは、どちらが得をしたと思いますか？——「お店屋さん。」——どうしてお店屋さんの方が得をしたんだと思いますか？——「仕入れた値段はもしも40円だとしたら、売ってお金は50円になったり60円になったりするから。」——だから、その10円分だけでもうけるからってことか。じゃあ、太郎くんは損をしましたか？——「別に損はしてない。」——別に損はしてない？——「ま、損、20円分や10円分損しとるけど。」

本児は、仕入れや利益についても知っている。しかし、利益の大小がどう決まるかについてはわかっていないようである。これについては、想像によってではなく、経済学的な学習によってわかることなのである。

どうしてバナナよりもスイカの方が高いんですか？——「大きいし、うまいから。」——大きいもんは何でも高いんですか？——「うまいもんが特に高い。」——じゃ、メロンとスイカはどっちが高い？——「メロン。」——……Hくんはうまいと思うかもしれんけど、私はスイカの方がおいしいって言うかもしれんで。だったら、私スイカはとってもおいしいと思うから、スイカたくさんお金払いますって言うんか？——「栄養分がある。」——栄養分があるから、それが高いんか？にぼして知つとる？こんなちっちゃいのでな、だしとか取るやつ。使わんか？——「にぼしか？」——あんなんって骨になるのんやがあつてな、こけても大丈夫なのに、栄養がたくさんはいつとるで。だけど、あれも高くないで。——「なら、栄養分があつておいしいもの。」

物の価格がどのようにして決まるのか考えることは、子どもにはたいへん難しい課題である。6年生でも初めその物自身に備わっている性質に注目する。「大きいから」は、ほとんどの子どもに共通した最初の答えである。しかし、その矛盾を指摘されると、本児は、別の感覚的属性である「おいしさ」に注目する。再びその矛盾を突かれると、今度は「栄養分」という、非感覚的な(自然科学

学的)な概念を持ち出す。こうしたことは、本児がすでに矛盾を察知できること、抽象的な概念を扱えることを意味している。

しかし、社会科学的概念を扱うことは更に困難なことである。「栄養分」だけではうまくいかなくなると、「栄養分があっておいしい」という交わりによる説明を行う。本児は、こうした集合の関係まで用いることができる。だが、価格という対象にふさわしい扱いにはまだ届かない所に、本児はいる。

もしもあなたが値段をつけるとしたら、はまちとたいとどんなふうに値段をつけますか？——「なんぼでもええ。」——でも、理由をつけてつけるんだよ。あなたなりの理由をつけて？——「たいが1,300円、はまちは1,100円。」——どうしてそうつけたの？——「たいはおいしいし、栄養分があるし、でかいから。」——それから、はまちを1,100円にしたのは？——「たいよりうまくないし、栄養分がたいよりないから。」——……いわしてな、栄養分もあるいろいろな料理に使えるけど、なんで安いんだ？——「こげるから。こげたりするから。」——こげる？——「こげたら悪いから。」——どういうことか教えて、わからないから。——「焼いたときにこげたりしてから、いけんけ。体に悪いから。」

本児は、様々な理由について考察することができる。しかし、それだけではものの本質へ向かうことは保障されない。

大人の人はどうして働くんですか？——「子どもを育てたりするため。」——じゃあ、もしも子どもがいなかったら、大人の人は働かないんですか？——「自分を育てる。」——ほかの理由では働きませんか？自分が食べていくために働いとんさるか？——「あ、おとうさんやおかあさんのため。」——……じゃあ、Hくんはな、大きくなって働きたいと思いませんか？——「別に思いません。」——どうして別に思わないんですか？——「たいぎいから。」——働いたことがありますか？どうしてたいぎいっていうのがわかるの？——「肩が凝ったりするから。」

本児は、一貫性を求める。働くのは誰かを育てるためであるし、誰かのためであると考え。そこから、「自分を育てる」というような表現を作り出したり、「おとうさんやおかあさんのため」を思いついたりする。一般的な命題と個別的な事象との行き来が始まっている。

この子どもたちは、働くことが「たいぎい(疲れる)」と考えている。一方、働くことは「お金」と結びつけて考えられている。したがって、労働について考えるときは、そのどちらかが前面に出て他を押さえ込んでしまう。

じゃ、大人の人はね、働いたらお金を稼ぎますか？——「はい。」——どうしてお金が稼げるんですか？——「働いているから。」——どうして働いたらお金がもらえる？——「働けばいろんな人からお金がもらえて、そのお金。」——いろんな人って、どんな人がお金くれるの？——「ホテルだったら、泊まって来たもんがお金くれるけ、それでやる。」

討 論

ここでは、関連する諸研究と比較しながら、本研究の特徴・意義を明らかにしたい。

まずはじめに述べなければならないことは、児童の社会認識についての心理学研究は非常に乏しいということである。これは、social cognition (社会的認知) という領域の研究が直接的な対人認知や感情の理解を対象としたものであることから推測できる (Shantz, C. U., 1983: 大島, 1986)。自然認識や自己認識についての研究が数多くなされている中で、社会認識について心理学的に明らかにされているところは少ない。こうした現状の下、本研究は資料的にも意義を有するものと考えられる。

ところで、Strauss (1954) は、「お金」に対する認知の研究を行っている。そして、ものと値段との対応の理解について調べ、「どんなお金でもどんなものをも買える」とするレベルから「値段と支払いとの正しい理解を獲得する」レベルまで、4つの水準を区別した。また、Berti and Bombi (1986) も「お金」に関する縦断的研究を行い、支払いの意識のない第1段階からおつりの正しい使用に至る第6段階まで区別して示している。これらは、「お金」という極めて社会的な事象を対象とした点、意義あるものである。しかし、子どもの社会の見方 (社会認識) を明らかにしたというよりは、価格に応じたお金を支払えるかどうかという実際の問題にとどまっているという限界がある。

これに比して、Furth, Baur and Smith (1976) は子どもにインタビューしながら、子どもの社会的な思考に接近している。彼らは、社会的な事象の理解に関して4つの段階を区別して示している。第1段階は、「観察された出来事を越えた推論のない段階」である。第2段階は、社会的機能の部分的な認識と結びついた推論の段階、第3段階は、「広範な機能の理解をするが、論理的非一貫性を伴う」段階、第4段階は、「社会制度を貫く一般的規則の把握によって、論理的非一貫性を克服する」段階である。本研究では、子どもの社会認識に関して、場面的思考と推論的思考とを区別し、その移行における困難点を明らかにしてきた。Furthらのいう第1段階は、本研究の場面に拘束された思考の段階に相当する。しかし、そこから越えて発達していくすじ道は、1ステップずつ第4段階へ移行していくものとは考えにくい。むしろ、本研究の資料が示しているように、子どもは経験や大人からの伝聞、「対」(Wallon, 1945)の影響の下、それらと葛藤しながら、社会的推論へと至るのではないだろうか。この点については、今後検討を有する課題である。

文 献

- Berti, A. E. and Bombi, A. S., 1981, The development of the concept of money and its value: a longitudinal study, *Child Development*, 52, 1179-1182.
- Furth, H. G. Baur, M. and Smith, J. E., 1976 Children's conception of social constitutions: a Piagetian framework, *Human Development*, 19, 351-374.
- 大島尚 (編) 認知科学 新曜社 1986 44-47ページ
- Piaget, J., 1926, *La représentation du monde chez l'enfant*. 大伴茂 (訳) 児童の世界観 同文書院 1955
- Shantz, C. U., 1983, Social cognition, Mussen, P. H. (ed.) *Handbook of Child Psychology* vol III, 495-555.
- Strauss, A. L., 1954, The development of conception of rules in children, *Child Development*, 25, 193-208.
- Wallon, H., 1945, *Les origines de la pensée chez l'enfant*. 滝沢武久・岸田秀 (訳) 子どもの思考の起源 明治図書 1968

